

病める維摩の方便と慈悲

—新型コロナに二度罹患した体験を踏まえて—

2022年2月と7月、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に二度罹患した。おそらく一度目はデルタ型に近く、咽頭痛は皆無で、ウイルスが気管支で増殖している感じがあり、生まれて初めて40度を超える高熱を出した。二度目はオミクロン型だったが、免疫があったお陰が、喉が少しイガイガするくらいでほぼ無症状で済んだ。ただ、後遺症には長く悩まされた。本題にある『維摩経』(Vimalakīrtinirdeśa, 以下Vkn)の主人公・維摩(Vimalakīrti)も病の床に臥せるが、結論を先に言ってしまうと、もちろんCOVID-19のような、実際の感染症そのものに対する治療薬や治療法が本経で描かれているわけではない。維摩が病になるのは、衆生救済のための巧みな方便であり、大悲を契機としている。維摩のような菩薩たちにとって、輪廻は衆生を加護することそのものであり、輪廻を抛り所として、無明や有愛といった病(煩悩)の原因があり、衆生の苦しみが続く限り菩薩たちも共に病むのである。つまり、『維摩経』で描かれる病は煩悩の譬えであり、大悲を契機として善巧方便として煩悩に塗れる菩薩のための心構えや振る舞いについて、教えが説かれているのである。

そこで本発表では、病についての記述が多く見られるVknの第4章(漢訳では第五章)を中心に、本経が提唱する煩悩という病への洞察と対処法を、智慧と結びついた方便、発菩提心を基盤とした慈・悲(・喜・捨)から考察する。それは、『般若経』から受け継がれた、冗長になりがちで難解な空性思想を、現実を四苦八苦して生きる人間の日常(実践現場)と繋げるものである。すなわち、菩薩(bodhisattva)とは「菩提(覚り)を求める者」であり、その出発点は発菩提心(bodhicittotpāda)にある。『維摩経』では、病める菩薩である維摩を通して、煩悩の世界に生きる人間が覚りを求めて生きるとき、空性を正しく理解すること—それは般若であり菩提である—が正しく慈・悲を発揮するためには必要であることが説かれる。そして、その般若は方便とお互いを必要としあう。このように、菩薩の起点であり抛り所である発菩提心とは、菩提を中心に慈・悲や方便が有機的に連携し、これらを習得していく動的な過程を指す。

また、悲(karuṇā)は英語で“compassion”と訳されるが、その語義は「共に(com-)苦しむ・耐える(passio)」というラテン語からくる。これを現代的に訳すとしたら「共感力」とでも言い換えられるが、社会福祉学の分野では既に「共感疲労(compassion fatigue)」が定義されている。いわゆる、燃え尽き症候群・代理トラウマ・二次的外傷性ストレスというような、他者の苦悩や悲しみに寄り添いすぎてしまい、自身の心が過剰に疲れやストレスを感じてしまうことから起きる心身の不調である。この問題に本経がどう応えているか、特に検討する。最後に、本経の病についての描写や内容と直接結びつけることは出来ないが、不二の

教えや発菩提心の観点から発表者の COVID-19 の罹患体験から感じたことを共有したい。

キーワード：菩提心，病，共感疲労